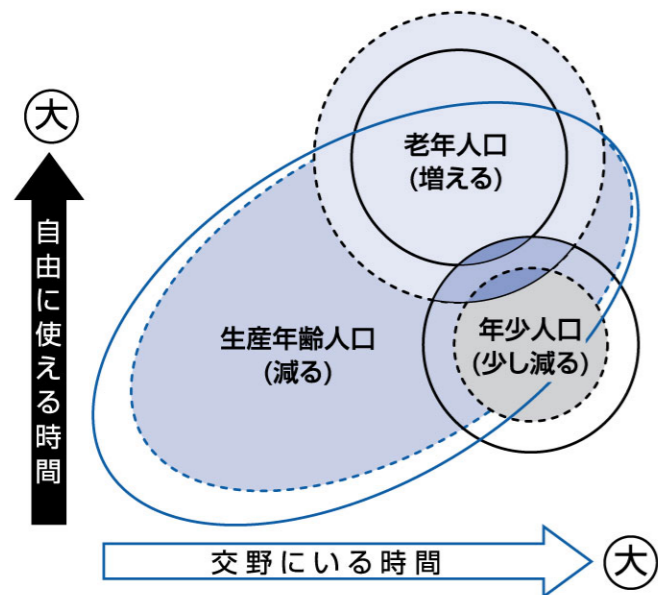


<人口のとりえ方>



時間については、交野にいる時間が多く、自由に使える時間が多い人ほど、交野の活力源となりうるという考えです。

そこでまず“かたの”に関わって活動する人、これを【活動人口】としてとらえます。老年人口の伸びは、活動人口の伸びの可能性でもあります。活動する人を増やし、すでに活動している人は、その活動時間を少し増やします。

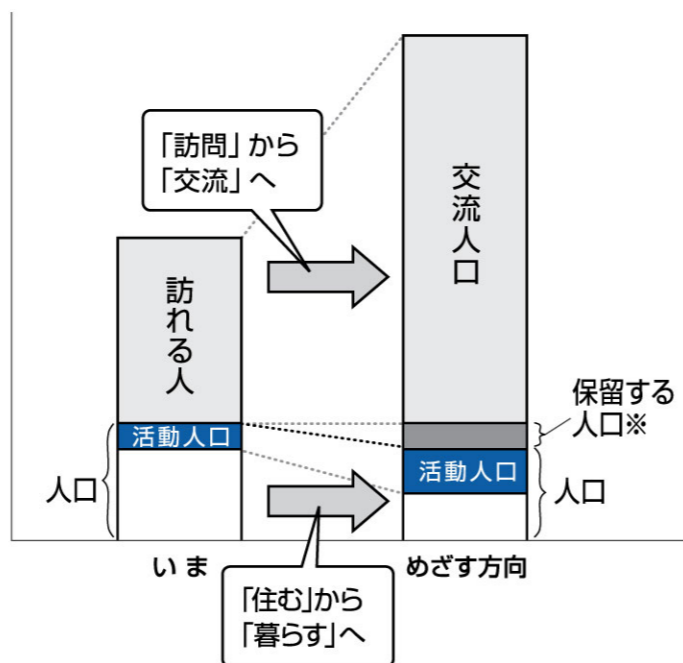
生産年齢人口の減少は、労働機会を市内に生み出していくことで、交野での時間と自由時間を増やし、活動可能な時間を増やします。年少人口も減少しますが、その活動にまちとの関わりを増やすことで、活力を増進します。このようにして活動人口を増やしていきます。

次に市外からの訪問者やインターネットなどの情報媒体を通じた訪問者を【交流人口】としてとらえます。こうした方々を“かたの”応援者として、その共感を呼び、交流を増やし、“かたの”に力をもたらして下さるようになります。このようにして、従来の人口規模の概念を変える取り組みにより、みんなの“かたの”の夢を実現するための力としていきます。

なお、総人口、人口構造に対しては、行政が取り組めるものとして、新たな市街地開発が考えられますが、社会経済状況や交野の財政事情を踏まえると自ら積極的な投資は行いません。しかし、民間開発動向や地権者意向を踏まえて、計画的な土地利用の誘導策を講じることを前提に、この構想策定時の人口規模程度の確保は、その可能性を保有しておきます。



<人口のめざす方向>



※保留する人口：まだ具体的ではないが、新たな市街地の創出などにより生み出される可能性を見込んだ人口

空間形成

交野のまちの構造は、大きく山地部と市街地部に分かれています。そのうち市街地部には、京阪交野線、JR学研都市線、天野川、第二京阪道路といった特徴的な構造をなすものがありますが、全体として、中心的なまちなみもなく、旧集落、農地、新住宅地、事業所などが、集積するでもなく、混在するでもなく、ほどよい関係性を保ちながらまちを形成しています。こうした構造を踏まえ、あるものを活かしたまちの環境の基本的な方向を示します。

●生命の空間

山地部は市民共有の財産として、これまでも大切にしてきました。これからも可能な限り自然のままに残し、生命感がかもし出される空間として維持していきます。

●暮らしの空間

市街地部は、住宅開発が進行する中、古い建物や道筋、農地など、どこか田舎らしさを感じさせるとともに、川やため池などの水辺のホッとする空間があります。こうしたさりげない空間を大切にするとともに、そこで様々な活動が展開され、暮らしのあり様が五感をほどよく刺激するような環境を創出していきます。

●交流の空間

第二京阪道路は、車のみならず、自転車、歩行者の高規格な空間が創出されており、たくさん交流が楽しめるよう活用していきます。また沿道の土地利用についても、新たな都市機能の創出が見込まれる場合には、周辺との調和を図りつつ計画的な誘導を図ります。

●賑わいの空間

主要駅周辺においては、その立地特性を活かし、人が賑わうような空間としての活用をしていきます。

●事業の空間

工業系を中心とする事業空間は、近くで働くことができ、その事業活動がまちにも還元されていく暮らしとのかかわりの深いところであり、より一層まちとのつながりを深め、全体で事業活動を盛り上げていくような空間として創出していきます。

●物語を育むまち

まち全体が醸し出す風土を大切に、営みやまちなみ、歴史文化といった様々な要素を活かして、住む人、訪れる人、それぞれの物語が育まれるようなまちとなるように、ほどよくしつらえていきます。

<空間形成の基本方向>

物語を育む

